

時空に身を浸して

村尾誠一著

『会津八一——奈良大和を愛し、古寺巡礼の歌を詠う』

笠間書院二〇一九年一月

本書は、コレクション日本歌人選第IV期の一冊として刊行されたもので、会津八一の歌五十首（俳句一句を含む）を紹介している。底本とされた『会津八一全歌集』の八八六首から、奈良の歌、京都他の古寺の歌、八一の生涯に関わる歌が選ばれており、歌と併せて鑑賞を読んでいくことで、会津八一の人となり、業績、人生が浮かび上がってくる構成となっている。鑑賞文中に出てくる人名、用語や事項についての注記も充実しており、予備知識のない読者に対して懇切な書であると同時に、歌人のファンにとっても、作品世界をより深く味わうことのできる手引きとなっている。

俳句をのぞく四十九首の歌はすべて、分かち書きのひらがな表記で掲げられているが、これは、書家でもある八一が模索の末に血肉化した表記法であるという。

中世和歌の泰斗である著者、村尾氏は、巻頭に、「東大寺にて」という詞書のある

おおらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけは
あまたらしたり

の一首を掲げ、奈良を歌う歌人としての八一から語り起こしている。結句の「あまたらしたり」(世界を覆うようにしていらつしやる)の解説は以下の通りである。

『万葉集』の読者であれば、天皇が国土を統治する様を詠む言葉として記憶されていよう。聖武天皇による総国分寺として建てられた寺だから、その解も間違いではない。しかし、八一は、美術史の専門家である。八一自身の手になる自歌に対する注である『自註鹿鳴集』ではお経に拠る表現であることを注する。(中略)つまりは、世界の中心にあり、世界中を救いの志でおおふ仏である。大仏の真の大きさはそこにあり、それを八一は「あまたらしたり」と表現したのである。八一の仏像の歌は美術史の専門家としての学識に支えられているのである。

のびやかな万葉調のしらべの奥に、八一の美術史家としての学識があることを知れば、この歌が、目に映る仏像の姿を描写するにとどまらず、仏としてのあり方をも示していることがわかる。

また、二首目の

あまたたびこのひろまへにめぐりきてたちたるわれぞ
しるやみほとけ

について、村尾氏は、

八一の学問は、数えきれないほどに対象の前に立った鑑賞体験

に裏打ちされたものであった。(中略)この仏像のことを本当に知っているのはじぶんだという美術史学者としての自負はあるだろう。

と、学者としての八一像を述べ、同時に、

一方、「しるや」という仏像に対する問い掛けには、どうしようもない孤独感と淋しさがある。(中略)八一の奈良巡礼は、美術史の研究の旅ではあれ、恋愛の問題とも推測される事情や、勤め先の学校での問題の煩悶を抱える旅であったこともある。奈良の仏はそうした心を傾ける対象でもあった。だが、それは叶わないのではないかと思う故の孤独感がある。仏像を歌う八一の歌にあふれている独特の情感は、そうした事情にも由来するのだと考えられよう。

と、八一の歌に漂う淋しさを解説している。

八一の歌に見られる淋しさといえ、十三番目の歌、

あめつちにわれひとりゐてたつごときこのさびしさを
きみはほほむむ

が想起される。評者には、中学校の修学旅行で奈良・京都を訪れる際に出会ったこの歌によって、古都で仏像に対峙する際の視点が規定された記憶がある。がやがやと騒がしい制服の群れの中にいても、仏と向き合う「我」は一人なのだ、と。それが淋しさかどうかはわからないまでも、何か心に「しん」とする

ものをたたえた状態で仏に向き合うのが作法のような気がしたのだった。

会津八一の歌は、多くの人々にとって、古都奈良への誘いそのものだろう。本書の七割を占める奈良の歌を一つ一つたどっていくことで、読者は、いながらにして奈良の古寺巡礼の旅を味わうことができる。それは、八一の歌の魅力であるとともに、八一と同じく、奈良という歴史的空間に身を浸し、美術と学問と「いにしへ」に耽溺する喜びを知る筆者の村尾氏の筆致の魅力でもある。八一は、歌集『南京新唱』の自序において、自らの歌を、

ここにして詠じたる歌は、吾ながらに心ゆくばかりなり。われ今これを誦すれば、青山たちまち遠く繞(めぐ)り、緑樹薨に迫りて、恍惚として、身はすでに旧都の中に在るが如し。

と語った。その奈良の風光と美術に対する八一の思いが、自ら述べるように「酷愛」であれば、八一の歌の背景を解きほぐし、描かれる景物を細やかに生き生きと語る村尾氏の、奈良という時空への思いは、「甚愛」と言えるかもしれない。

奈良を詠う歌のほか、集中には

家主に薔薇呉れたる転居哉

の一句が採り上げられている。注釈には、

八一の俳句は句集も作らず、初期の活動にとどまるが、短歌

における万葉尊重や写生的な態度なども、子規からの影響と言つてよいであろう。八一の文学形成に、子規の影響は大きいのである。

とあり、また、巻末の解説には、

『万葉集』は、子規以来の近代短歌の一つの共通基盤である。詩型が連続する以上、和歌からの連続は避けられず、短歌らしさは、古典和歌との「しらべ」の連続性を絶つては実現しがたい。子規以来、近代人の思念の表現と同質の写実的な歌として捉えた『万葉集』こそが、「しらべ」を支える源泉であった。八一にとつても同様に考えてよいであろう。だから、歌の纏う古風な印象は、近代文学であることと矛盾はしないのである。

とある。正岡子規の歌集『竹乃里歌』の評釈を著書に持つ村尾氏ならではの解説であろうと思われる。

(菅長理恵)

